「日々の理科」（第 2364 号） 2021,-1,-1

「晩秋の高尾山自然観察行（５）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

高尾山の登山道には、このような左右が土の斜面になっているところが多い。これは自然観察をする者にとっては、誠に好都合である。あまり無理な姿勢をせずに、対象物に眼を近づけることができるからだ。

私は荷物が重くなるのを恐れて、スマホのカメラしか持参しなかったが、露木先生はちがっていた。デジタルカメラ数台、それにカールツァイス製の双眼鏡まで持参している。双眼鏡は、梢の葉、樹皮の様子、それに樹上の野鳥や小動物の巣の観察にも威力を発揮するのだ。

道端に落ちていたのは、ヤマノイモ（自然薯）の「むかご」である。先日の小石川植物園では発見できなかったので、都合の良い発見だった。今のシーズン、観光地の売店で売っているのを見かけることもある。

ケヤキの巨木の根元に見つけたのは、「ジクモの巣」だ。中にクモがいるかどうかはわからなかった。クモはもちろん小さな虫を狙っているのだが、そのクモを狙う別の生物もいる。「クモタケ」という冬虫夏草の一種だ。少し周囲を探してみたが、見つからなかった。

一年草や宿根草が枯れた状態では、種の同定（名称決定）が難しいものだ。これも最初何の果実だかわからなかった。しかしさすがは露木先生、「ホトトギスの果実」と教えてくれた。なるほど、枝の分岐のしかたが、まさに「ホトトギス」（草本植物）である。

冬でもキノコはわずかに見つかる。大抵は革質で腐らない子実体だ。左側は「カワラタケ」右上は「カイガラタケ」という。いずれも木材腐朽菌の代表である。